

会員増加を目指した学会コンテンツの提供方法について



東京理科大学 教授
鈴木 知道

日本品質管理学会にとっての大きな課題の一つに会員数の増加が挙げられる。この課題は本学会に限らず、あらゆる学会が常に直面している重要なテーマであろう。何度も取り上げられているテーマであると思うが、学会の現状やとりまく変化に着目して、施策や提供内容そのものよりも、主にその実施方法や実施形態について述べていきたい。新型コロナウイルス感染症の影響で、学会の多くの事業や学会内の委員会の形態が変わったが、それら影響は一段落ついている状況である。改めて、どんなことができるか考えてみた。

品質管理学会の会員数については、歴代会長や理事の皆様の尽力により、賛助会員に関しては増加している。しかし、正会員については大苦戦しているのが現状である。品質管理学会の正会員数が最も多かったのは、2000年から2002年の狩野先生が会長の時代である。その後、会員数の減少が止まっていない。品質管理学会としては手をこまねいているわけではなく、中期計画を継続的に掲げ、更新し、それに基づいて活動してきた。それでもなお、減少に歯止めがかかっていない。時代の流れ、と片付けてしまうのは簡単かもしれないが、それでは根本的な解決にはならない。やはり社会の多様化や、ダイバーシティが進んでいることを適切に把握し、対応していくことが望まれる。

学会の主なアウトプットの一つに、研究論文がある。電子化が進む以前は、論文を読みたいと思ったら、その論文が掲載されている学術論文誌の学会に入会し、印刷物を入手するしかなかった。過去に出版された論文についても、その学会のバックナンバーを購入するか、あるいはその学術論文誌を蔵書している図書館等に出向き、その場で閲覧またはコピーを取る必要があった。大学の図書館や研究室において、有名な雑誌のバックナンバーを揃えているこ

とは、ステータスの一つであり、研究の拠り所でもあった。論文が研究の拠り所であることは今も変わらないが、その後は著者名や論文タイトルに関しての電子化が進み、現在では多くの学術論文誌で論文本体も電子化されている。さらに、オープンアクセス化が急速に進み、学会に入会しなくても多くの論文が読めるようになっていく。もちろん、当該学会に入会していないと読めない論文もあるが、まずは論文を探すという観点からは、インターネットで検索すれば多くの論文に行き着くのは事実である。このような状況下での学会のプレゼンスを上げる方策については、引き続き検討が必要である。

論文だけでなく、学会誌の記事も同様である。インターネットで検索すれば、多くの品質管理の記事がヒットする。それらの記事は玉石混濁ではあるが、似たような状況である。解説や論説等の一般向けの記事については、競合は他の学会等の雑誌だけではなく、YouTube等の動画配信がある。内容的にはよいものが準備出来たととしても、それが多くの人々の目にふれるように工夫することが重要である。

もう一つの観点は、提供する対象の拡大である。これまで会員施策は国内に向けられてきたが、言語の壁はあるものの、海外の会員を視野に入れたい。「品質」誌も一部の論文は英語で書かれているものの、ほとんどは日本語で書かれている。日本の品質管理や広く品質管理に興味を持つ海外の方々もいるであろう。近年は自動翻訳技術が飛躍的に進歩している。新しい記事だけでなく、過去の「品質」誌や研究発表会報告集を英語に翻訳し、発信することも可能だと思う。

もちろんリソースの制約はある。だがスマートフォンスタートでよいので、より多くの人々が品質管理に接する機会を増やし、最終的には学会員の増加や学会の活性化につながるような施策を考えていきたい。